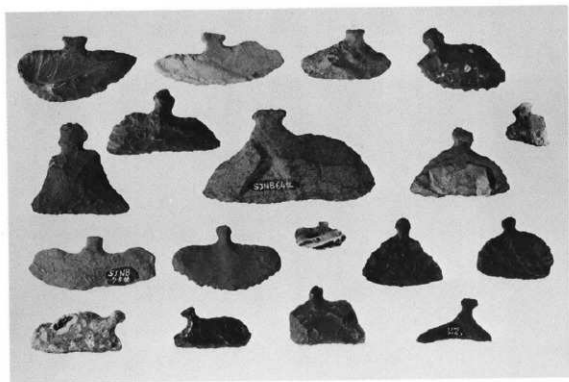
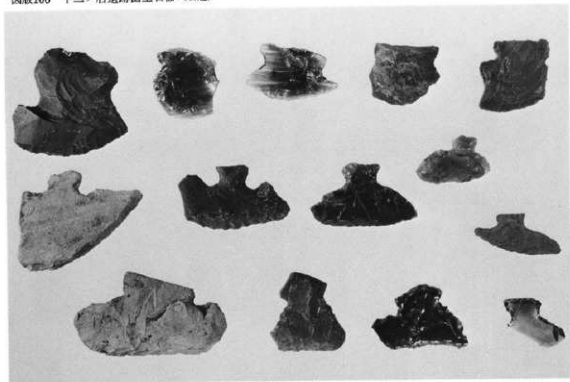
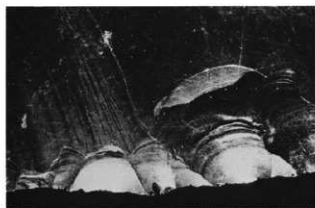


石鏃—無基凹基・無基尖基・有基，石槍，抉入刺突具，石匙—縦型・斜型（1：2）

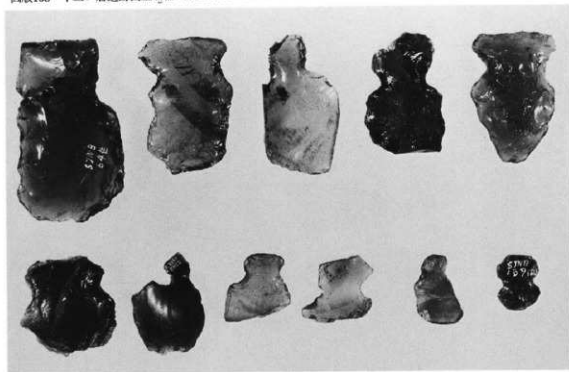


續型・斜型(1:2)

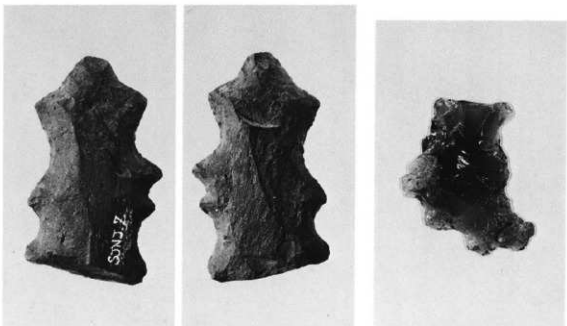
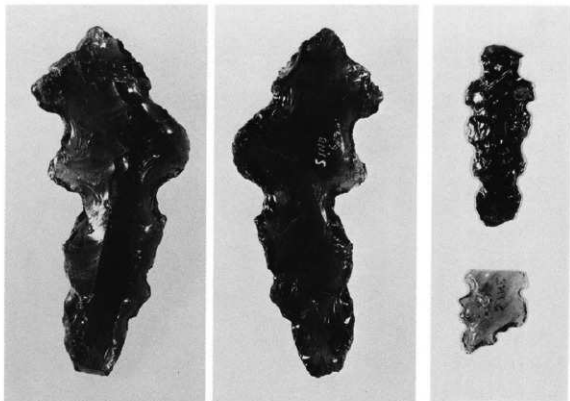


上 スタレイバー (1:2), 下 使用痕 (線条状) (×3)

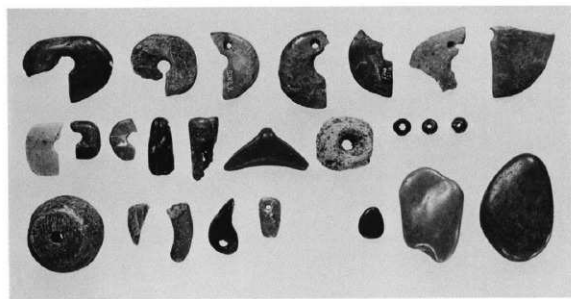
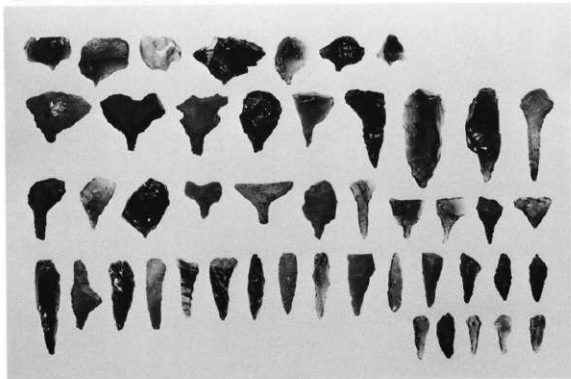
図版108 十二ノ后遺跡出土石器（小型有快顯磨石器）



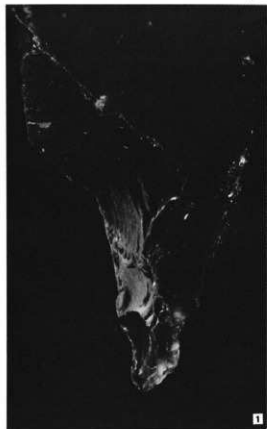
上 小型有快顯磨石器（1：2），下 使用痕（点状痕・線状つぶれ）（×3）



複製挿入石器 (1 : 1)

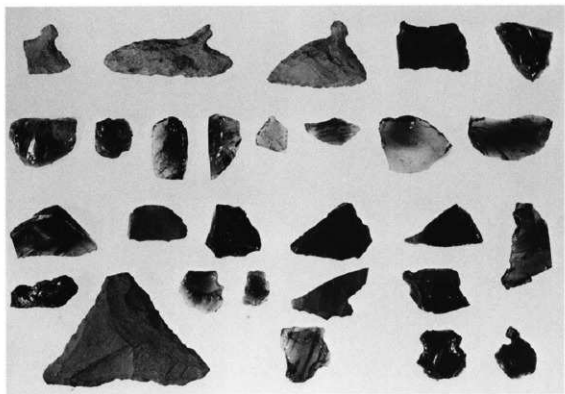
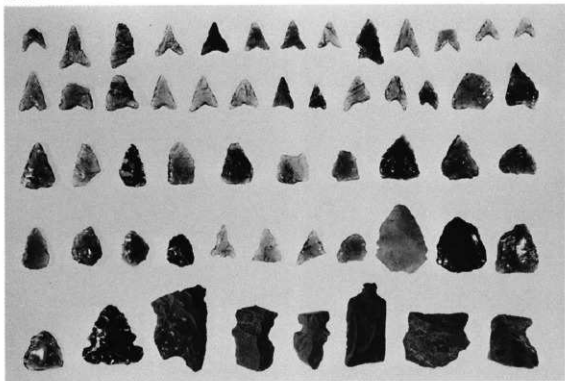


上 石鏃，下 装身具・石製紡錘車（1：2）

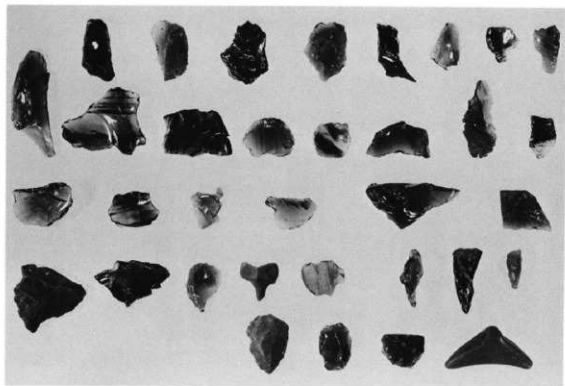
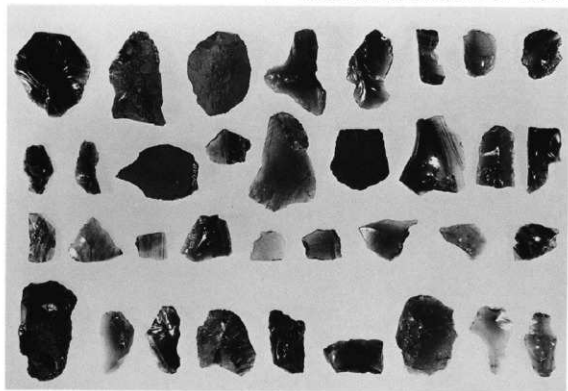


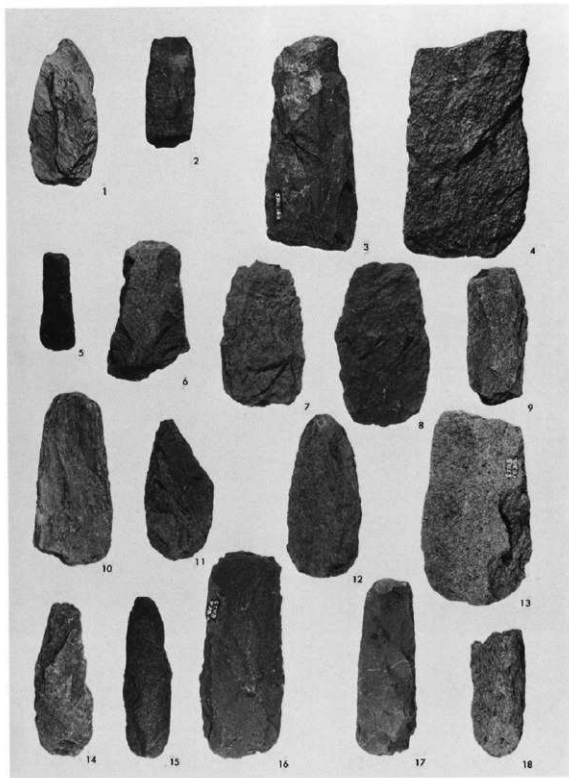
1～4：石塊，5：原石，6：剥片（1・5・6：照肌，2：つぶれ，3・4：磨耗）（1・6：×3，5：×4，他は×5）

図版112 十二ノ后遺跡16号住居址出土小形石器 (その1)

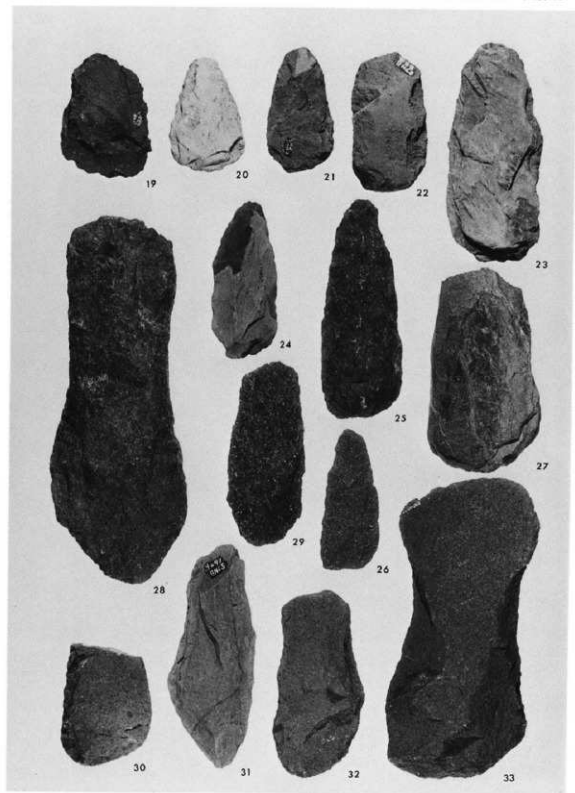


(1:2)

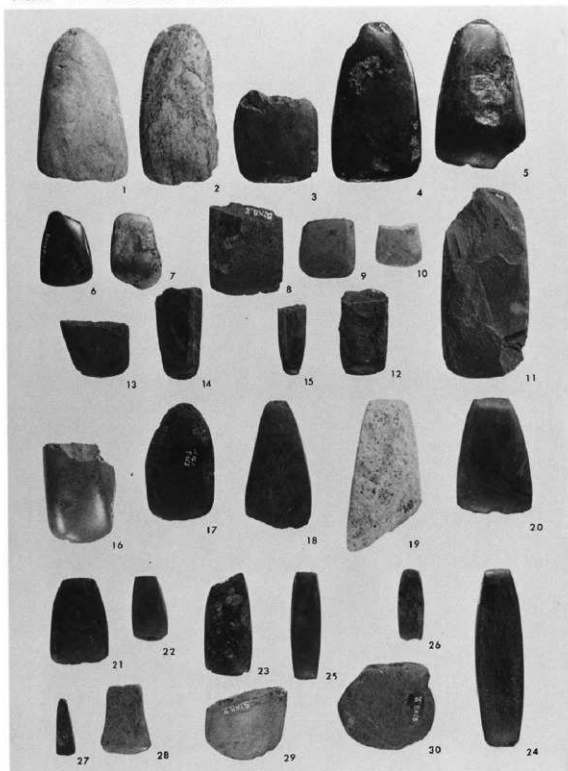


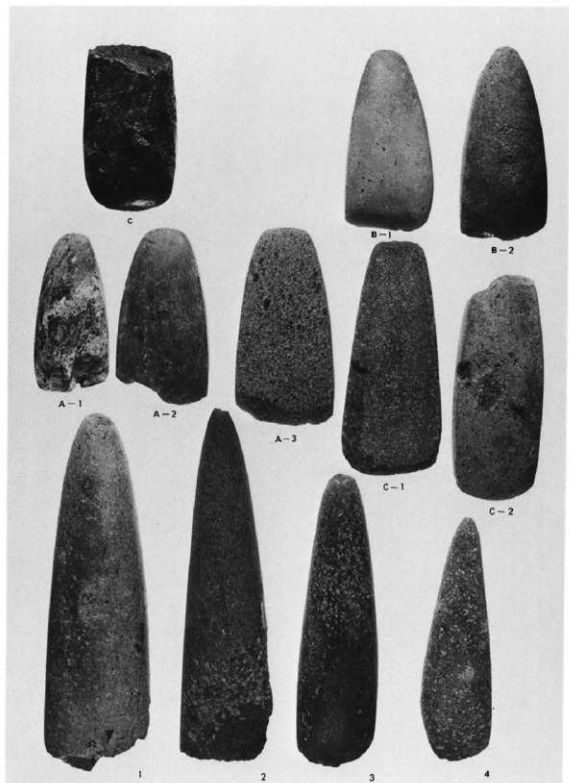


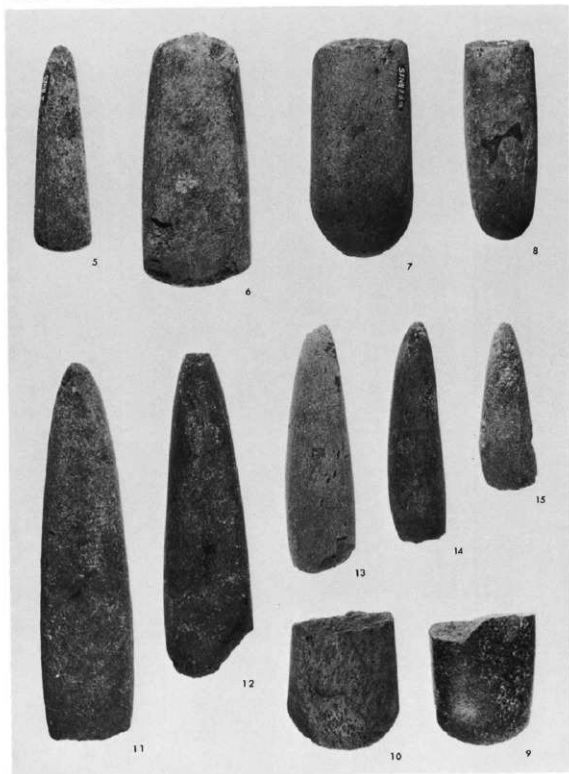
(約1:2.5)

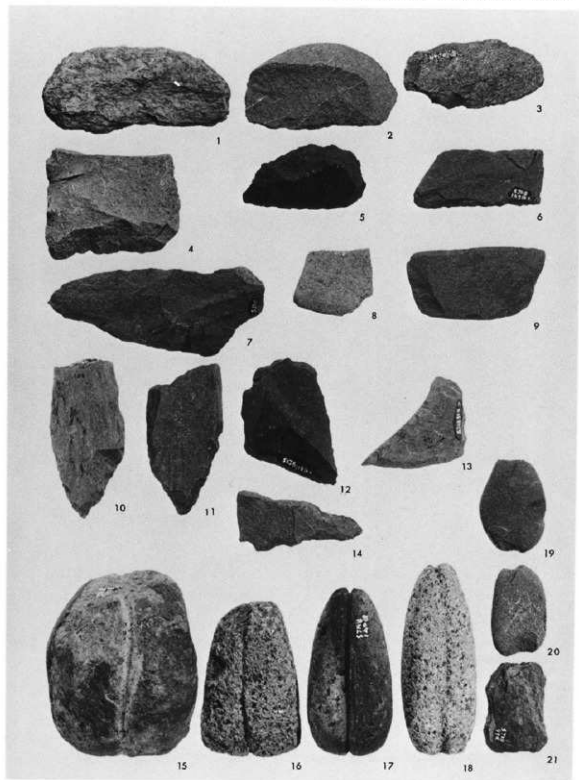


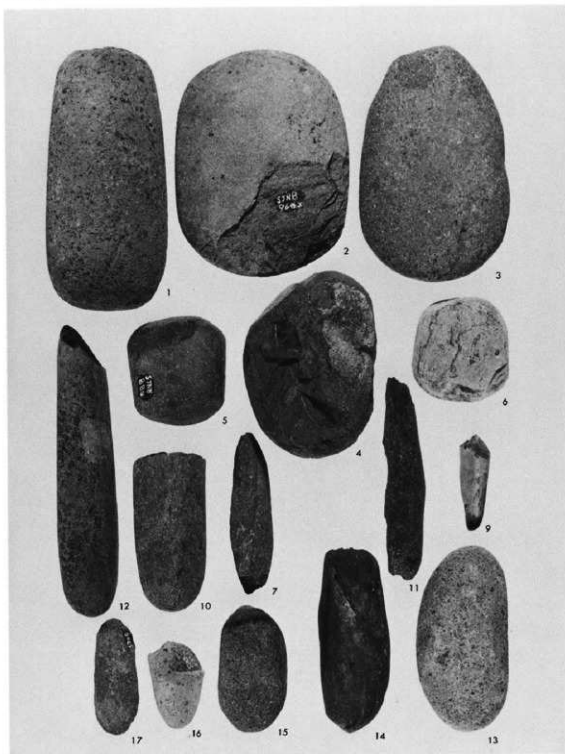
(約1:2.5)

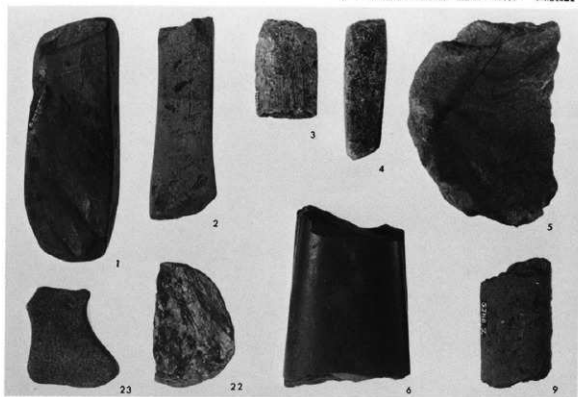




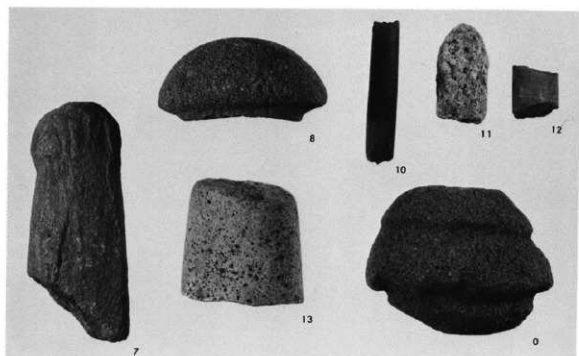




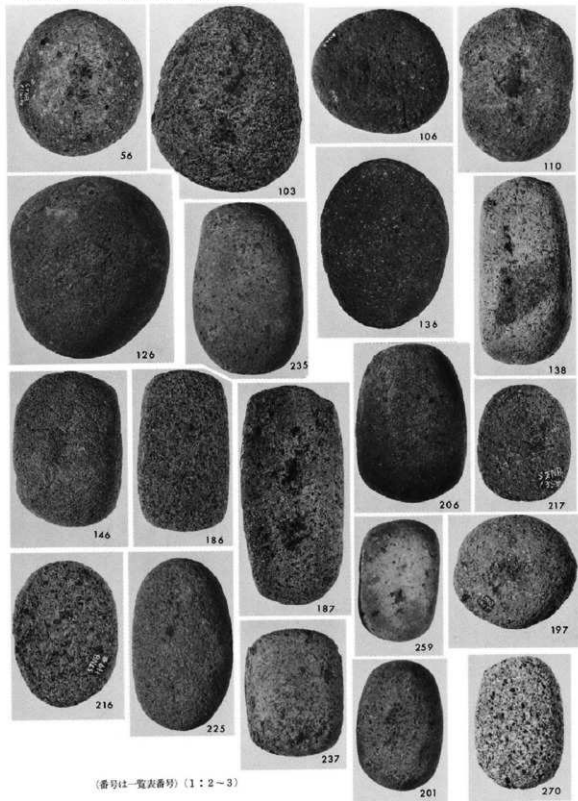




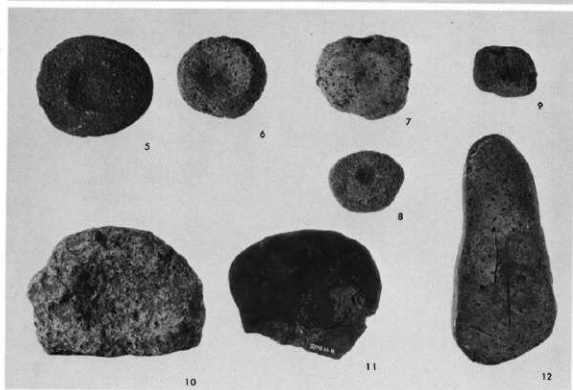
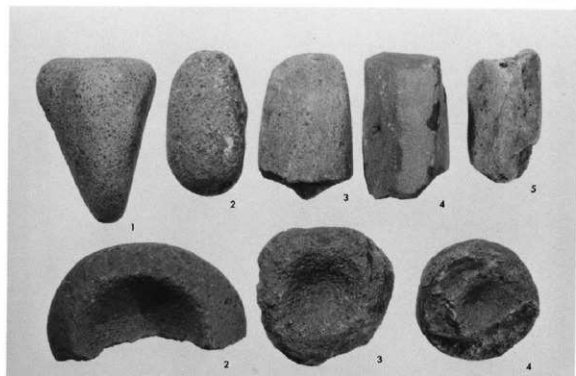
(約1:2)

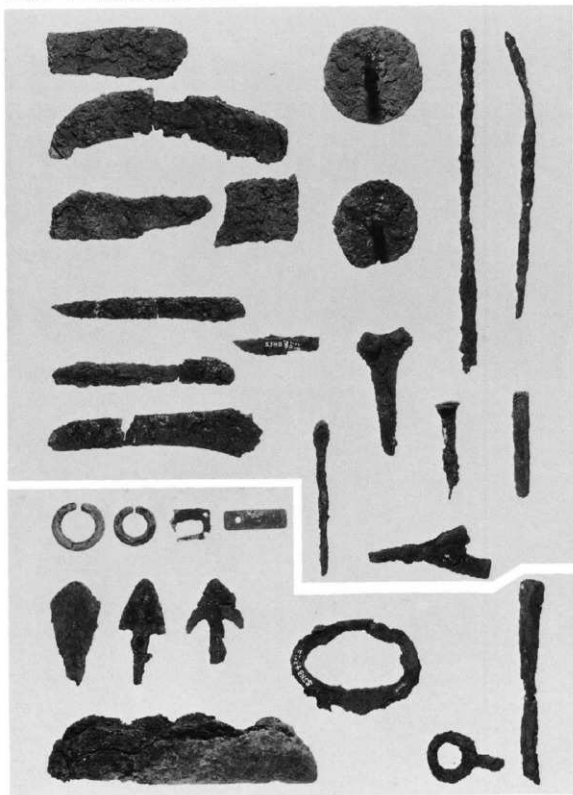


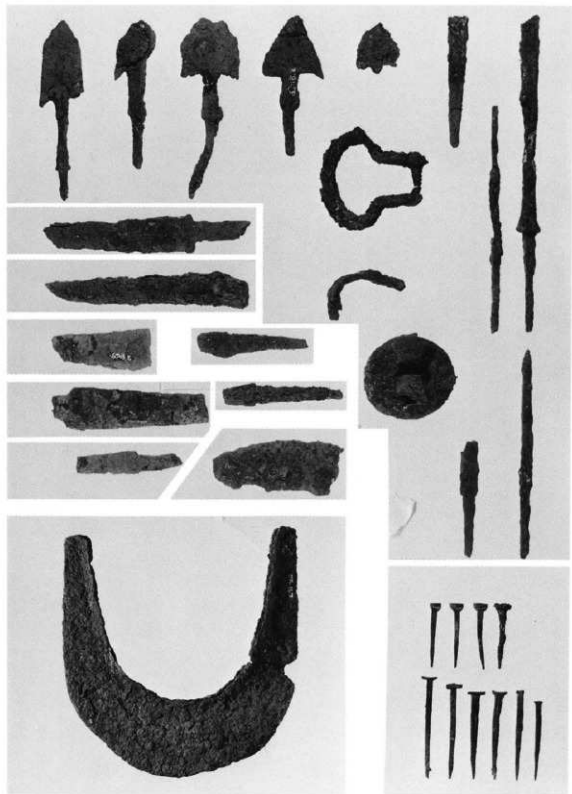
(約1:3)

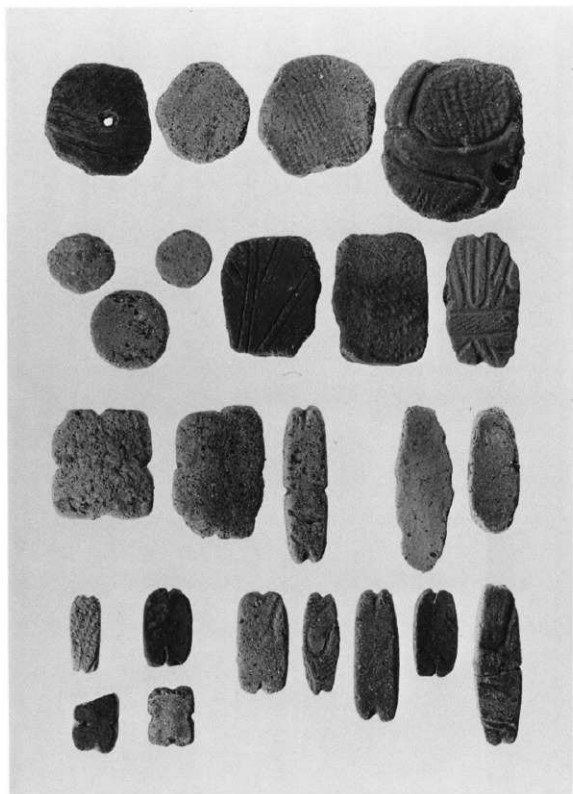


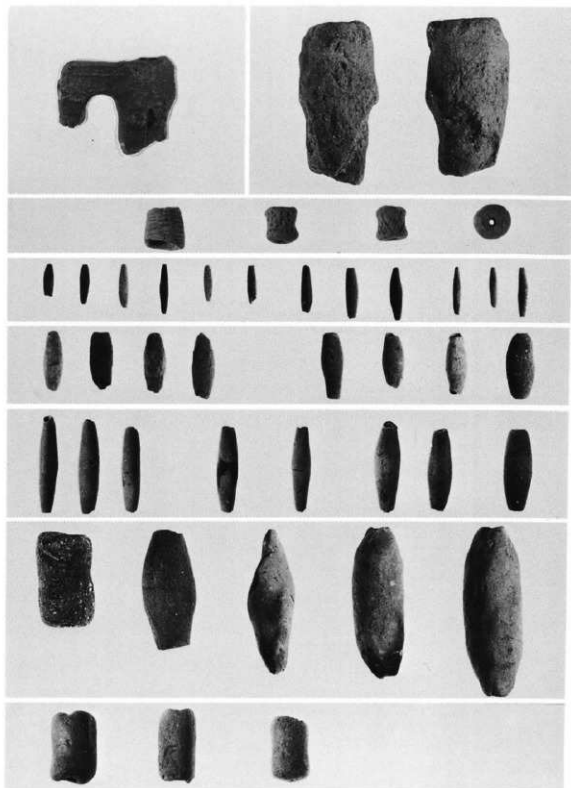
(番号は一覧表番号) (1: 2~3)

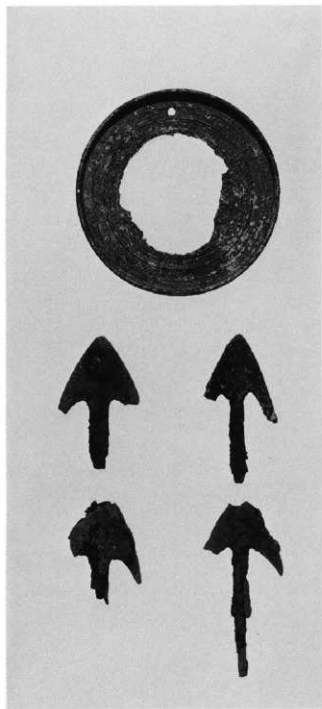




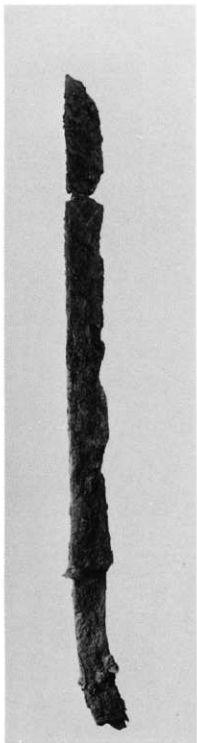




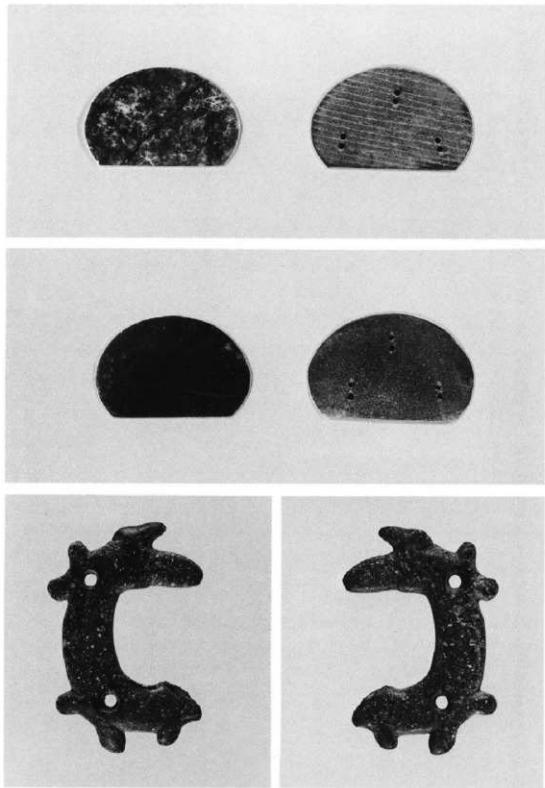




(1 : 2)



(約1 : 1.5)



上・中：石帯，下：子持勾玉（1：1）

報告書作成関係者一覧

本書は、種々の事情により刊行がおくれたため、報告書作成作業に従事した担当者の移動が多く、当初計画したものより大幅な変更を余儀なくされた。ために、最終的原稿執筆者は各項の末尾に氏名を記したが、それ以前の関係担当者は省略してある。現場発掘調査については本文3頁に記してあるので、それ以後の各項担当者を以下に記し、本書完成の臨の力となっていたいただいたことを感謝したい。(順不同)

整理復元作業	辰野伝衛	根津清志	福沢幸一	小松原義人	堀 知哉
	細川光貞	木下平八郎	平出一治	松永清夫	郷道晋章
	高桑俊雄	田畑辰雄	小林正春	福島邦男	三浦孝一
	村上ゆゆ子	矢島宏雄	長沼英光	岩崎孝治	藤森美枝
	山本賢司	坂野和信	佐藤信之	中島庄一	知名定順
	片山 徹	山内志賀子	坂倉たせ子	丸山雅子	関 喜子
	矢崎つな子	矢島忠美子	赤羽淑子	島田哲男	
拓 本	根津清志	小松原義人	堀 知哉	細川光貞	山内志賀子
実測・トレース	平出一治	松永清夫	高桑俊雄	小林正春	田畑辰雄
	福島邦男	村上 孝	矢島宏雄	山本賢司	坂野和信
	中島庄一	丸山雅子	宮沢亘之	山田瑞穂	伴 信夫
	福沢 浩	小林秀夫	青沼博之	百瀬長秀	土屋 積
写 真	現場では各担当。整理段階では主に木下平八郎が当り、各主任が一部分担した。				
土 器 復 元	最終段階では主に福沢幸一が分担した。				
編 集	当初は山田瑞穂(金舞場・初送山)、宮沢亘之(十二ノ后)が中心となり、今村善興がこれを総括した。宮沢の退団後は山田が中心となり、実測区、拓影図の製版を終了し、図版類は今村が編集した。山田・今村の退団後は樋口昇一が全般を引継いだ。				

あとがき：中央道関係の遺跡調査としては、最大級であった十二ノ后遺跡、それにつづく金鉤場遺跡、と追加の二遺跡、計4遺跡の報告がようやく終了した。共に2ヶ年におわたる調査であり、山田・宮沢両主任の労苦は大変だったと聞く。とくに十二ノ后遺跡担当の宮沢主任は、整理もその初期の段階で退団をよぎなくされ、さぞ心残りであったと思う。その後は調査期間中の雨天の日や、冬期限の整理日、分担した団員により引き継がれてきたが、最大のネックは、調査担当者の退団による能率の悪い作業工程であった。ぼう大な資料に振り回され、最後に責任者となった私などは、全体像の把握もできず、団員諸氏に御迷惑ばかりおかけしてしまっただけ。それに加え、発掘資料の量と報告書の頁数の調整がつかず、二転三転し、ようやくここに到着した。大幅な頁数削減のため遺構説明は極端に簡略化し考察篇ともいうべきまとめに全力をという計画であったが、これまた途中変更を余儀なくされ、実にバランスのとれない内容となり、中途半端な結末となってしまった。多くの労力をさいした団員諸氏におおびすると共に、本書を利用される方々に御了解ねがいたい。50年度は、大石遺跡というもう一つの大遺跡にあたり、共に同じような経過をたどって今日に至った。500頁をこえる両報告書をいよいよ出版する段階に到り、あらためて関係諸機関、関係者全員の皆様の御援助・御協力に厚く感謝申し上げます。とくに、両書出版に当たった電算印刷関係者には、相当無理な注文ばかりおねがしたにも拘らず、心よくお引受けいただき東催ながら御礼申し上げます。

(樋口 昇一)

長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

一諏訪市 その4一

昭和51年3月10日 印刷

昭和51年3月20日 発行

発行者 日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

印刷所 松本市筑摩3270
電算印刷株式会社
電話 054329 (代表)
〔非売品〕

付図 十二ノ后遺跡における奈良・平安時代の土器編年(1/2)

	土師器	黒色土器	土師器	須恵器	灰釉陶器
I					
II					
III					
IV					
V					
VI					
VII					
VIII					
XI					
X					

0 20 40cm

